

遠願寺址石塔の四天王像・十二支像

李 鎮 榮

〈Summary〉

In the *Enganji's* stupa at *Gyeongju*, Korea, four heavenly kings and the Zodiac figures are enshrined, but little research has been conducted on them until now. These works are considered to have been produced in the first half of the 8th century because they have much in common with those of the early unified Silla in the second half of the 7th century. This paper will examine the meaning of the *Enganji's* stupa of the unified Silla Era and determine the period of time when it was built.

はじめに

韓国慶州の遠願寺は、13世紀の記録である『三国遺事』「明朗神印」によると、統一新羅(660~935)の都の慶州の東南部に位置する寺院であるが、金庾信(595~673)らが創建した寺院とされる¹⁾。しかし、金庾信は統一新羅初期まで活躍した武将であり、創建年代が8世紀半ば~800年を前後すると位置付けられる遠願寺址東西石塔(図1)とは年代の開きが大きい²⁾。そのため、本格的な寺院としてなり得たのは8世紀になってからであろう。また、同寺については、他の史料には恵まれず、石塔は20世紀にはすでに倒壊された状態で発見され、舍利容器など年代がわかるものも伝来しない³⁾。



図1 遠願寺址東西石塔 (①・②) 8世紀前半 塔高570cm 慶州 石造

遠願寺址石塔に関する先行研究は乏しく、年代についても決着はついていない。その原因は、遠願寺址東西石塔のような8世紀以降の双塔伽藍は、7世紀後半(統一新羅初期)に出現した双塔伽藍の配置形式や石塔様式を踏襲したものだとする認識にあると考えられる。遠願寺址石塔も

双塔伽藍として、同寺石塔には守護尊として初層に四天王像が、上層基壇に十二支像が浮彫されており、四天王寺双塔（679年）のような、基壇に守護尊を安置する7世紀の規範に基づいていることは間違いなく。しかし、統一新羅の石塔として初めて守護尊を塔表面に表現したと考えられることから、遠願寺址石塔は大きな意味を持つ。

本稿は、遠願寺址石塔の四天王像と十二支像の形式・様式を中心に検討し、同塔の建立年代と、両守護尊を安置した意味の解明を目的とする。方法としては、7世紀～8世紀の統一新羅の仏塔（石塔）などの作例と比較しながら建立年代を論じていく。また、四天王像とその眷属とみられる基壇の十二支像においては、唐僧道宣が執筆した『戒壇図経』（667年成立）と、それに基づいている7世紀（新羅）創建の通度寺戒壇との関わりについても触れていきたい。

1. 四天王

遠願寺址双塔の初層は、各面に縦方形の額縁を設けて立像の四天王を浮彫する点が特徴的である（図2）。石塔初層に「門扉」（額縁）を浮彫する最古作としては、中央の2か所に各3か所の孔を設けて取手を止めた痕跡が残る、高仙寺址石塔（686年以前）がある（図3）。高仙寺址石塔では四天王像は省略こそしているものの、遠願寺址石塔の初層ではこの石塔初層の門扉の表現規範に基づきながらも、同様の門扉の中に四天王の表現を追加していることがわかる。

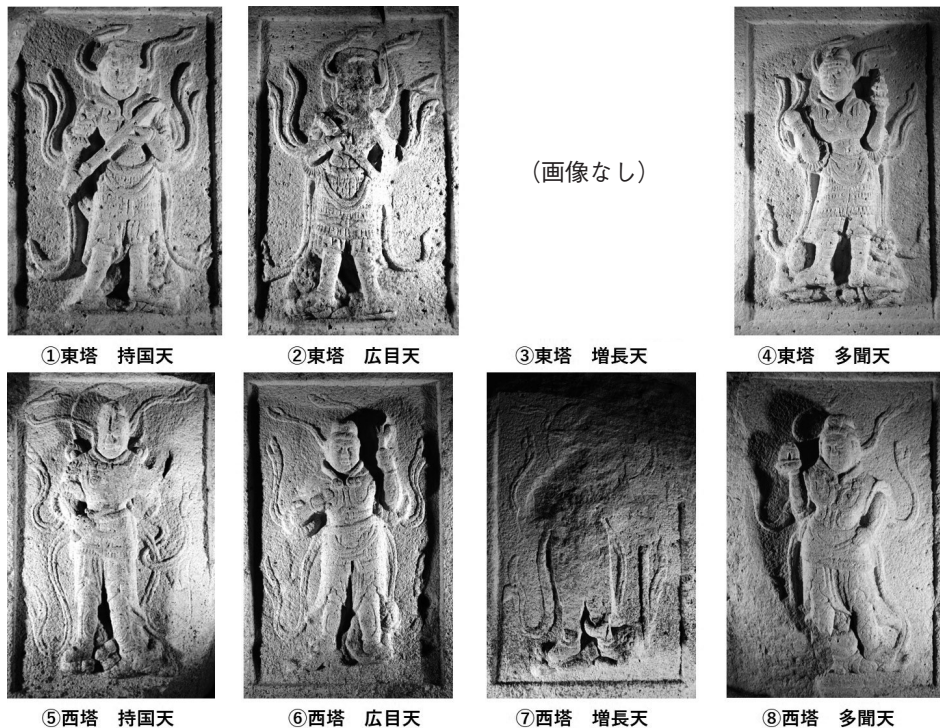


図2 遠願寺址東西石塔の初層の四天王像（①～⑧）8世紀前半



①全体

②初層門扉

図3 高仙寺址石塔と初層門扉 (①・②) 686年以前 国立慶州博物館蔵 塔高10m



①東塔持国天

③東塔広目天

⑤東塔増長天

⑦東塔多聞天

②東塔持国天の持物

④東塔広目天の持物

⑥東塔増長天の持物

⑧東塔多聞天の持物

図4-1 感恩寺東塔舍利容器の四天王像と持物 (①-⑧) 682年 国立中央博物館蔵 金銅製

また、四天王と門扉を示す、遠願寺址石塔に先行する作例としては、羅原里石塔舍利容器（7世紀末～8世紀初）や、『戒壇図経』の影響が指摘される四天王寺塔（679年）⁴⁾がある。四天王寺塔では基壇に安置した守護尊はアーチ型の門扉中（格狭間中）⁵⁾に浮彫される。

682年の感恩寺東西塔舍利容器（図4-1及び図4-2）においては、遠願寺址と同じく邪鬼の上に四天王が立ち、四天王の両脇には獅子頭部で装飾した取手があり、はっきりと「門扉」を表現する。また、遠願寺址東西石塔と感恩寺址東西石塔の舍利容器において、四天王を門扉中に描いたという共通点は注目すべきである。

これについては、道宣が667年に執筆した『戒壇図経』の祇園精舎図が注目される。同図では中央の七重塔の他に、比丘・比丘尼戒壇を東西に配する（図5）。後述するように道宣は、同書

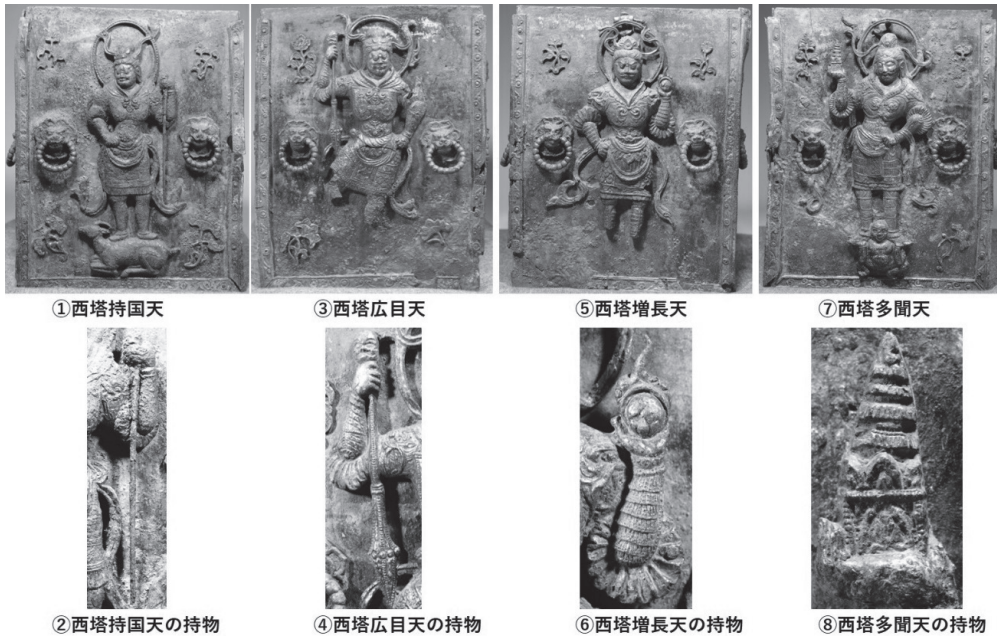


図4-2 感恩寺西塔舍利容器の四天王像と持物 (①-⑧) 682年 国立慶州博物館蔵 金銅製

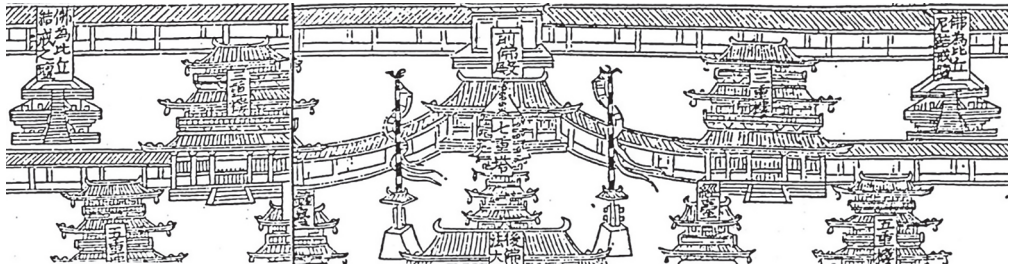


図5 『戒壇図経』 祇園精舎図の東西 (比丘・比丘尼) 戒壇 667年



図6 葛項寺址東西石塔の四天王像の浮彫痕跡 (①-④) 758年 国立中央博物館蔵

で「舍利を安置した戒壇は仏塔である」とし、仏塔であるとみなした東西戒壇にはそれぞれ四天王などの護塔神を配置することを規定する。であるとするならば、『戒壇図経』の影響が指摘される感恩寺址舍利容器も⁶⁾、戒壇型として⁷⁾四天王や東西塔を含めて考えると、『戒壇図経』に従っているとみなすことができる。こうした作例から、取手を省略して四天王を表した「門扉」

を表現した遠願寺址東西石塔は、『戒壇図経』を含む7世紀後半の規範に基づいていると推察できる。

一方、統一新羅の石塔に浮彫を施した多数の作例では、木塔の柱を簡略化した隅柱を、塔身の四隅に表現することで、自然に門扉のような空間ができるため、浮彫のための空間はほとんど設けられていない。また、守護尊を浮彫する8世紀の紀年銘作として現存最古である、758年作の葛項寺址東西塔がある⁸⁾(図6)。同塔には初層四面に四天王を浮彫した痕跡があるが、同じ四天王でありながら遠願寺址石塔のような門扉はない⁹⁾。また、それ以降も初層に隅柱を表現しながらも、門扉を設けて四天王を表現する事例は少ない¹⁰⁾。遠願寺址石塔には、2・3層塔身にも隅柱の内側に額縁を設けているが、この形式は他の塔にはほとんど例をみない。この形式は、四天王を浮彫した初層の門扉に沿ったもので、7世紀後半の規範に拘ったことが窺え、葛項寺址東西塔より先行する作例と考えられる。

ところで、遠願寺址の四天王のような門扉は、邪鬼を踏む四天王が前室の左右壁面に配置された8世紀前半の石窟庵にもみることができる¹¹⁾(図7)。もちろん、石窟庵の他の様々な尊像も、四天王のように額縁に示されているため、石塔と全く同様の意味を持つとは言えない。しかしながらも、四天王に限ってみると、それぞれが護持する四方の「門」という意味においては、遠願寺址石塔と同様であり、石窟庵は遠願寺址石塔に影響を与えたのであろう。



図7 石窟庵の四天王像(①-④)8世紀前半 慶州 石造 像高248~250cm

2. 四天王の図像

遠願寺址の四天王は、いずれも鎧をつけ、天衣を上下に翻して光背を有し、邪鬼を踏む形で持物を握る(図2及び8)。先述の感恩寺址舍利容器の全ての像には、「菊花」のように細かい皺が円形をなす袖を表しており、これは遠願寺址の四天王にもみられる特徴である。次に、東西塔の

四天王について、各面にわけて触れていきたい。

持国天（東面）は、東塔では両肩に獅噛があり、邪鬼は持国天の左脚の外側に顔を出し、両手で持国天を支える。また、本像は、右手で刀を斜めに持ち、左手で刃を掴む姿勢をとる。西塔の持国天も、右手は欠けるが同様の姿勢と持物で、肩には獅噛があり、邪鬼は両脚の間に顔を出す。また、両肩の炎に包まれた宝珠は、7世紀後半の慶州・錫杖寺址出土の多聞天（塑像）、羅原里塔舍利容器や石窟庵のすべての四天王にみられる。さらに、遠願寺址石塔の持国天が、石窟庵の持国天（図7）のように、両手で斜めに剣を持つ同様の姿勢を取る点は留意すべきである。

広目天（西面）は、東塔では顔面と左手が欠けているが、右手に握った金剛杵の先を左手で掴んでいたことがわかり、また、邪鬼は右足の外側に顔を出す。持物については、感恩寺舍利容器の広目天（図4）と一致する。西塔の広目天は、東塔とは反対側に顔を出し、右手で右足を支える邪鬼を踏む。また、右手を胴部に当てて反対の手で三叉戟（さんさげき）を握る姿勢は、反対の姿勢で戟（げき）を握る感恩寺舍利容器の広目天（東塔）と共通する。

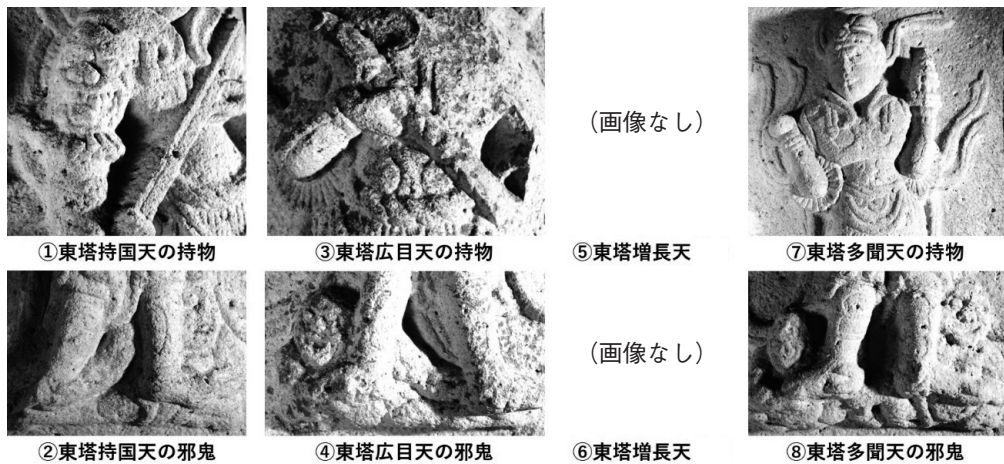


図8-1 遠願寺址東塔の四天王像と邪鬼（①-⑧）

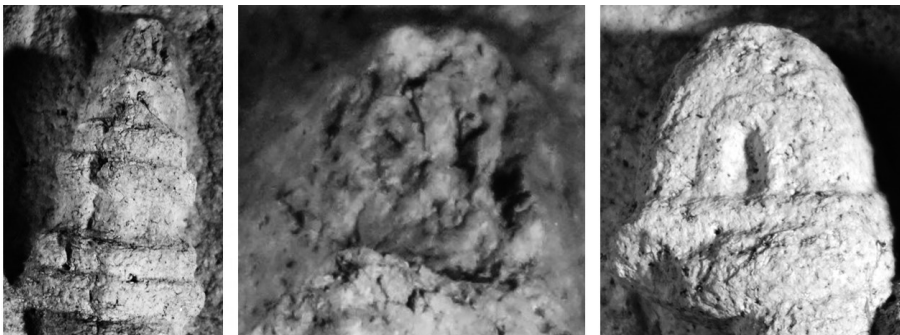


図8-2 遠願寺址西塔の四天王像と邪鬼（①-⑧）

増長天（南面）は、東塔では欠落している。西塔の増長天もほぼ欠落しているが、右手で刀を垂直に立てており、感恩寺址東塔舍利容器の持国天（図4）と同様の姿勢をとる。邪鬼は増長天の左足の外側に顔を出し、上半身は増長天の左足に、下半身は右足に踏まれた状態で、東西塔の中でも唯一の仰向きである。

多聞天（北面）は、東塔では二頭の邪鬼が、両足の外側に頭部を出しながら両手で多聞天を支える点が、邪鬼が一頭である他の四天王とは異なる。多聞天は左手で宝塔を、右手で宝珠をほぼ垂直に持ち上げる。両方を同時に持つ作例は数少ないが、感恩寺西塔舍利容器の増長天（図4）が左手で垂直に火炎宝珠を持つことから、その影響と思われる。さらに、腰付近の蓮華飾りは、感恩寺址四天王にもみられるものであり、それ以降の四天王ではさほどみられない。西塔の多聞天は、右足が欠けるが、東塔の多聞天とは反対の手で宝塔を持ち上げ、もう一方の手は腰にあてている。邪鬼は両足の間に顔を出しながら、自身の両足を左右に伸ばして多聞天のそれぞれの足を支えている。また、西塔の宝塔は半円形で中央に如来が座すような「窟」があり、東塔の宝塔の頂上には、身光を備え蓮華座に座す如来とみられる姿がある（図9）。これらは如来を示す点において、感恩寺西塔舍利容器の多聞天の宝塔に近い（図4）。

結論として、門扉表現にこだわり、図像を含めて7世紀後半～8世紀前半の作例との共通点が多い遠願寺址石塔の四天王像は、先行する年代の規範を継承しているとみられる。したがって、遠願寺址石塔は、守護尊などを浮彫する8世紀の石塔としては、先述の四天王を浮彫した葛項寺址石塔（758年）よりも先行する最古作であると考えられる。



①東塔多聞天の宝塔 ②東塔多聞天の宝塔頂上の如来座像 ③西塔多聞天の宝塔
図9 遠願寺址東西石塔の多聞天の宝塔（①-③）

3. 十二支像

遠願寺址東西石塔の初層に浮彫した四天王のすぐ下の上層基壇部には、四面に蓮華座に座す獸頭人身の十二支像を三体ずつ方角に合わせて表現する（図10）¹²⁾。先述の高仙寺址石塔のように統一新羅初期の石塔の多くは、上層基壇には四面に各二本の付け柱を挟み、「面石」と呼ばれる空間が各面に三か所生じるため、計十二面ができる¹³⁾。このように、同様の構造の基壇を持つ遠願寺址石塔の上層基壇の各面にも、四面に三か所ずつ、計十二面が生じる。よって、後述するように、初層にある四天王の倍数となる眷属としても、同じ空間に十二支像が採択されたことは極

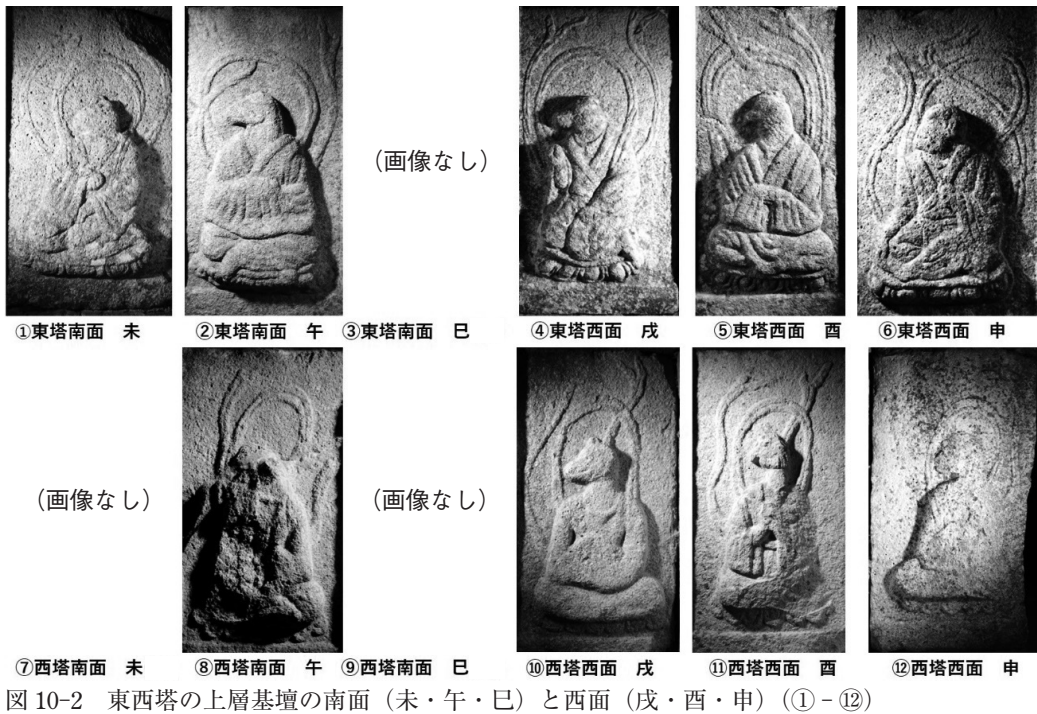




図 11 通度寺
戒壇舍利塔



図 12 大和寺址石造舍利塔 (①-③) 統一新羅 蔚山博物館蔵 高 90cm

めて相応しいと考えられる。

ところで、十二支像の特徴の一つは、蓮華座の下に高 13cm の区画を入れて、下層基壇との段差を作る点である。こうした区画は、他の塔には浮彫の有無に関わらず確認できないものである。この区画の意味としては、十二支の動物が住む場所を表現したものと考えられる。例えば、7 世紀創建の通度寺戒壇の舍利塔では下段部に高さ 16cm で区画を施し、その中に海や山を表現している (図 11)。これは、須弥山に関連するものとして、後述する『大集経』によると、十二支の動物が閻浮提の東西南北にある山と海を護持するというに由来すると考えられる。他にも、統一新羅の大和寺址舍利塔 (図 12) に表現された十二支像においても、海や山の表現が同様である。彼らはその下段部にある、高さ 16cm の空間の上に立つが、この空間は区画線がないのみで、通度寺舍利塔と同じく海や山を表現したものである¹⁴⁾。このようなことから、須弥山 (形) ともいえる石塔の東西南北を護持する、遠願寺址の十二支像下の区画線も、そうした舍利塔に近い表現として同様の意味を持つと言えよう。



①正面(本尊と金剛力士)



②側面(奏樂天人)

図 13 癸酉銘三尊千仏碑像 (①・②) 673 年 国立清州博物館蔵 石造

十二支像は、いずれも平服を着用し、多数は胸飾を有する。また、跪く像が多く、天衣を垂直に大きく翻しながら蓮華座に座す。顔の向きは北面の丑像以外はすべて左向きで、東西塔にそれぞれ表現される二体の動物の顔面の表現はいずれも異なる。また、蓮華座は東西塔ともに単弁（東塔午像のみ複弁）で表され、量感があり丸みを帯びる東塔に比べ、西塔は先が尖った花びらの中に、細い筋を入れて平面的に示す。そして、天衣が全像の頭部周囲に円形をなす点は、頭光を意図しており、その姿は飛天に近い。

遠願寺址の十二支像のように守護尊が蓮華座を有する表現は、統一新羅初期の、673年作の癸酉銘三尊千仏碑像にみられる（図13）。ここでは金剛力士が本尊の左右末端に、単弁の蓮華座に立つ姿で立ち並ぶ。さらに、その側面に表現された天人は、胸飾をつけて頭光を備え天衣を翻しながら、細長い単弁の花びらが平面的に表された蓮華座に跪いている。跪く像が多い遠願寺址東西塔の中でも、西塔の平らな単弁蓮華座は仏碑像の天人のそれに類似する。ただし、遠願寺址のように石塔基壇に浮彫される守護尊が蓮華座に坐す作例は数少なく、特徴が類似する仏碑像の年代に鑑みると、単弁蓮華座に坐す点は、統一新羅初期であるからこそ認められる特徴と考えられる¹⁵⁾。では、十二支像のそれぞれの図像についてみてみよう。

北面をみると、東西塔の丑像はともに、左斜めに跪いて頭部は反対に振り返る。東塔の丑像は開いた右手を上げ、反対の手は斜めに胴部にあてて跪く。西塔の丑像は胸飾をつけて帯が見える服装で、袖に隠れた両手はそれぞれの足の上に乗せる。東塔の子像は左斜めに跪き、袖に隠れた両手は拱手し、西塔の子像は胸飾をつけて正面向きで坐し、両手は合掌して胡坐をかく。東塔の亥像は胸飾をつけ、X字型に組んだ脚は胡坐をかいて左斜めに座す。右手は右膝につけ、左手は胸元に当てる。西塔の亥像も胸飾をつけ、拱手して正面向きの体は胡坐をかく。東西塔ともに、丑像のみがあえて胴部とは反対の右向きで振り向いている点は、中央の子像を挟み、亥像と向き合う形をとることによって「三尊形式」を表すことを意図しているためとみられる。

東面をみると、東塔の辰像は欠落しているが、西塔の辰像は胸飾をつけて拱手し、正面向きの体は胡坐をかく。卯像は東西塔ともに左脚を立てて左斜めに座るが、東塔では脚を斜めにして坐し、西塔では脚を垂直に立てて座る。東西塔ともに右手は下ろして反対の手は胸元につけており、また西塔像には胸飾がみられる。寅像は東塔では頭部は剥落しているが、隣の卯像のように左脚を立てて斜めに座っていることが確認できる。左手は左膝に当て、右手は胸元に上げている。西塔では正面向きの体は胡坐をかいて拱手し、胸飾をつけている。

南面をみると、未像は東塔では左斜めに跪き、右手は拳を握り胴部に当て、反対の手は右袖に入れようとする。西塔は欠落する。午像は東塔では拱手して体は正面向きで、胡坐をかいた両脚は複弁蓮華座上に突き出る。西塔ではほぼ欠落するものの、残る痕跡から東塔と同様の姿勢をとるとみられる。巳像は両塔とも欠落する。

西面をみると戌像は東塔では左斜めに跪き、右手を垂直に上げて左手は下方に下ろし、胸飾と腰帯をつける。西塔でも胸飾を有し、正面向きの体は胡坐をかいて拱手する。酉像は東西塔ともに体は正面向きで胡坐をかき、東塔では拱手し、西塔では合掌して胸飾をつける。東塔の申像は、



図14 薬師如来と四天王・十二神将 隋 敦煌第394窟

東塔北面の亥像のように左斜め向きの姿をとり、両脚を上げて胡坐をかく。右手は下方に下ろし、左手は胸元につけ腰帯がみえる。西塔は剥落が激しいが、拱手する正面向きの体は胡坐をかく。

一方、敦煌第394窟の隋時代の作例をみると、如来の周囲に三体ずつ四つの群れに分かれて跪く十二神将と、その下には武装した四天王が描かれている（図14）。遠願寺址石塔においても、同作例のように武装した四天王と、菩薩形で跪く像が多数含まれる十二体の守護尊の坐像が、如来を示す石塔の周囲に、四面三体ずつ配置された点が共通する。十二神将が後世に十二支と融合することを踏まえると、こうした隋時代の像が、遠願寺址十二支像の規範になった可能性も十分に想定可能である。また、中国の6～7世紀の石窟の中心柱や壁面の基壇部などによくみられる、様々な獣頭人身の守護尊も、遠願寺址石塔の十二支像の図像形成に関わっていると考えられる。

ところで、開元7年（719）銘の慶州・甘山寺址の如来像と菩薩像には、7世紀に類出する単弁蓮華座がみえる（図15）。特に、如来台座は単弁と複弁で示しており、同形式を持つ8世紀の記年銘作としては最も早い年代のものである。遠願寺址十二支像においては、複弁で示した東塔午像（図16）を除くと、他は全て単弁蓮華座であるため、単弁と複弁の両方を一緒に採用した



①如来台座

②菩薩台座

図15 甘山寺址如来・菩薩像の台座（①・②）719年 国立中央博物館蔵



図 16 東塔午像の複弁蓮華座

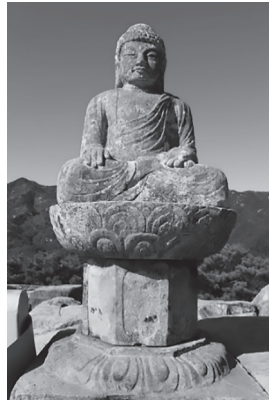


図 17 龍船台石造如来像 722~731年 全高 318cm

こととなり、この点は甘山寺址の如来像と共通する。単弁蓮華座はそれ以降にもみられ、8世紀以降に単弁のみを採用する例は、石窟庵本尊や、開元10(722)~19(731)年銘の昌寧・龍船台石造如来像¹⁶⁾(図17)が伝来する。ただし、8世紀半ばの獐項寺址西石塔では、八体の金剛力士は複弁蓮華座に立っており、遠願寺址十二支像のような単弁蓮華座は、8世紀前半以前に多く見られることが留意される。



①飛天



②飛天の拓本

図 18 上院寺梵鐘の飛天とその拓本 (①・②) 725年 銅造

他に遠願寺址十二支像に関しては、開元13(725)年銘の上院寺梵鐘の飛天が注目される(図18)。この飛天は、上半身に胸飾をつけ降臨して雲座に跪く姿である。また、垂直に翻す天衣の一部が頭部周囲で円形を描いて頭光をなす。複雑に絡み合う天衣の中には全て筋が入っており、その先は二股に分かれる点の特徴的である¹⁷⁾。胸飾をつけて跪く姿の遠願寺址十二支像は、天衣の表現を含めてこの飛天像の図像に近く、この梵鐘と同年代の甘山寺址の作例に鑑みると、720年代を前後する年代の作例として位置付けが可能となる。

4. 『大集経』と『戒壇図経』

遠願寺址十二支像は、新羅仏塔に安置された十二支像としては最も早い年代の作例である。仏教における仏教と十二支との融合は、北涼の曇無讖（385～433）が訳出した『大集経』において確認できるが、これは十二支の動物（十二獣）が登場する最古のものでもある。同経典によると、かつて菩薩の住処とされた東西南北の海と山にいる十二獣が、釈迦が閻浮提を遊行する際、常に須弥山底辺の閻浮提を巡るという。さらに、比丘と比丘尼などが、この十二獣を見ることにより、大神通力を得ると記される。また、その記述の末尾には、「白土作山」と表現される正方形の山が、幅七尺（210cm）と高さ十二尺（360cm）と説明される¹⁸⁾。この山の様態はもちろん、十二獣がいる須弥山とその周辺を意識したものと考えられる。これを踏まえて考えると、遠願寺址東西石塔の塔高は570～580cm、基壇を除いた塔身高は370～380cmであり、十二支像のある上層基壇の幅は、東西塔ともに220cmであることから、『大集経』に記述の幅210cm×高360cmに近い数値として興味深い。

それに続く『大集経』の内容では、十二獣と四天王をともに登場させ¹⁹⁾、四天王の倍数となる眷属として十二辰と二十八宿などを列挙する²⁰⁾。十二辰とは、道世が668年に執筆した『法苑珠林』に、十二獣を語る部分で「十二辰獣」とも呼ぶように²¹⁾、十二獣（十二支）であることは間違いない。遠願寺址石塔の四天王とその眷属であろう十二支の役割は、如来がいる須弥山四方とその底辺の閻浮提を護持することであり、同様の記述をする『大集経』の内容と矛盾しない。ただし、『大集経』には、これらを仏塔に安置するという内容はない。

この点に関しては、『大集経』の神々を護塔神として引用した、『戒壇図経』に注目する必要がある²²⁾。その中で、戒壇の上層基壇四隅に四天王を安置し、四面壇身に龕窟を設けて、各面に七星神（二十八宿）を安置すると規定する²³⁾。特に、四天王とその眷属を述べる部分で登場する二十八宿（七星神）は、『大集経』に従った四天王の眷属とわかる。

実際に、通度寺戒壇では『戒壇図経』に従い、上下基壇に二十八宿、下層基壇の四隅には金剛力士などの四体を安置する²⁴⁾（図19）。また、通度寺戒壇の1705年の修理記録である『康熙乙酉重修記』には、「又以蓋覆之四面上下三級七星分坐四方四隅八部列立上方蓮華石上以石鐘冠之



図19-1 通度寺戒壇（二十八宿と四隅の護塔神） 646年創建（高麗～朝鮮時代修理） 石造

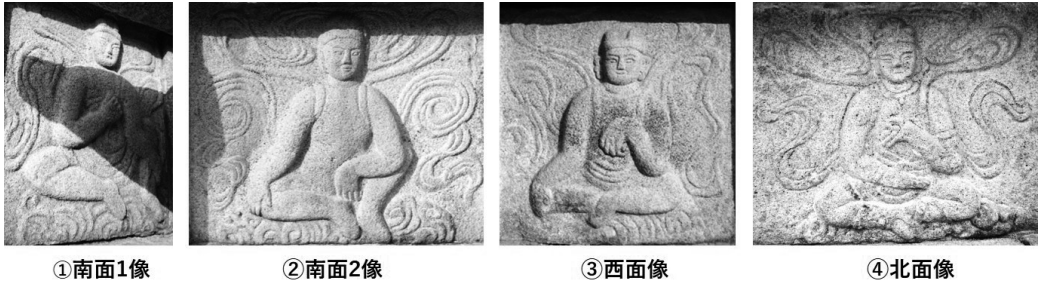


図 19-2 通度寺戒壇基壇の七星神 (①-④)

耳²⁵⁾とある。つまり、現状のように基壇の四面に七星神，上下基壇の四隅に「八部列立」とすることから、『戒壇図経』の通りに，現在の下層基壇の四隅の金剛力士などの四体以外にも，上層基壇の四隅には四天王を安置していたことがわかる。

これまでの検討をまとめてみることにする。まず、『大集経』では四天王とその眷属として，その倍数となる二十八宿と十二支を語る。『戒壇図経』においても『大集経』に述べる尊格を護塔神として引用したように，二十八宿（七星神）を四天王の眷属として語っていることがわかる。さらに，十二支と二十八宿はともに四天王の眷属として，方角を司るという共通点がある。また，十二支像は墳墓美術においては銅鏡などに，二十八宿や四神とともに表される場合も多い。遠願寺址石塔は仏塔として釈迦墓の象徴でもあるため，四神に代わる四天王と，その眷属として十二支が採択されたと考えられる。

次に，遠願寺址石塔の十二支像は，先行する通度寺戒壇の基壇に安置された守護尊の二十八宿（七星神）とともに，方角を司る四天王の眷属という点において，通度寺戒壇の影響が想定されるため，両者の比較をしていきたい。

現存する通度寺戒壇の二十八宿（七星神）は，いずれも雲座に座し，天衣を翻しながら胡坐をかく像が多い（図 19）。まず通度寺戒壇の南面 1 及び 2 像（図 19-2 の①及び②）は左脚を立てて座り，左手は左脚に乗せる。遠願寺址石塔の東塔東面の寅像は，側面から見た姿で表現しているが，左脚を立ててそこに左手を乗せ，右手は斜めで胴部に当てており，通度寺戒壇の南面 1 像に近い。また，遠願寺址の寅像の隣の卯像も左脚を立てて座り，左手は右斜めに上げ反対の手は下方に下ろしており，通度寺戒壇の南面 2 像に近い。

そして，通度寺戒壇の西面の像は胡坐をかいて右手を下方に下ろし，反対の手を斜めに上げており，遠願寺址東塔の亥像はこれに近い姿勢である。通度寺戒壇では北面の像のみが胸飾をつけているが，遠願寺址石塔では多数の像に胸飾が確認できる。

その上，通度寺戒壇では基壇各面ごとに，遠願寺址の門扉中に表現した四天王像や十二支像のように，付柱と隅柱を設けて，その中に二十八宿（七星神）を安置する²⁶⁾。つまり，通度寺戒壇と遠願寺址石塔の各面の中に安置された守護尊が，各方角の仏世界を護持するという共通点を持つ。

道宣は『戒壇図経』において，「戒壇は舍利を安置するため仏塔であり，唐言では方墳を意味

する」と記すように²⁷⁾、はっきりと戒壇を仏塔として認識している。すなわち、通度寺戒壇は、遠願寺址石塔のように「舍利(塔)を支える石造正方形二重基壇に守護神を安置した」最古の「仏塔」であるという点が留意される。

結論として、遠願寺址石塔の四天王像と十二支像は、『大集経』を引用した『戒壇図経』と、それに基づいた通度寺戒壇の影響が考えられる。特に、立像の四天王と座像の十二支像は、立像と座像が混合する通度寺戒壇の尊格と共通する部分として注目される。また、『戒壇図経』や通度寺戒壇の影響により、塔基壇に護塔神を安置した四天王寺塔(679年)や、基壇に守護尊を安置した感恩寺址舍利容器(682年)などの影響も無視できない²⁸⁾。

結び

以上、遠願寺址石塔の四天王と十二支像について述べてきた。石塔初層には、通常の石塔のように隅柱を表現しながらも、あえて門扉を設けてその中に四天王を安置する。四天王は持物やそれを持つ姿勢と鎧の形なども、7世紀後半～8世紀前半の作例と多くの共通点が認められた。

上層基壇の十二支像は、各面の方角に合わせて安置されている。同様の図像は、7世紀後半の天人像と類似する点から、これに基づいている可能性も指摘した。さらに、十二支像の単弁蓮華座は7世紀に多く見られ、単弁蓮華座が多い8世紀前半の記年銘作は年代判断のための大きな基準となる。また、各十二支像の下にみえる区画は、十二支像を表した大和寺舍利塔に鑑みると、彼らがいる須弥山底辺の海や山を意識したものと考えられる。

結論として、遠願寺址石塔の四天王像と十二支像は、『大集経』に基づいた『戒壇図経』やそれに従った通度寺戒壇などの、7世紀の規範を継承したと考えられる²⁹⁾。さらに、遠願寺を7世紀後半に創建したとの記録を勘案すると、遠願寺址石塔の四天王像と十二支像は、遠願寺創建と年代の開きがさほどない720年代を前後する統一新羅初期のものと位置付けたい。

注

- 1) 又新羅京城東南二十餘里有遠願寺。諺傳。安惠等四大徳與金庾信金義元金述宗等同願所創也。(中略)則廣學大縁二人。隨聖祖入京者。安師等。乃與金庾信等創遠願寺者也。廣學等二人骨亦來安于茲爾。非四徳皆創遠願 (大正 49.1011b～c)。
- 2) 国立文化財研究所『慶尚北道 石塔 3』2009, p. 181; 水野さや『韓国仏像史』名古屋大学出版会, 2016, p. 167; 呉世徳「遠願寺址石造物の造成時期と伽藍配置変化推定」『新羅史学報』35, 2015, pp. 137～168; 拙稿「統一新羅の十二神将に関する考察」『フィロカリア』33, 2016, pp. 85～107 など。
- 3) 同塔は、20世紀前半に能勢氏により、復元・研究がなされている(能勢丑三「遠願寺の塔と十二支神像について」『朝鮮』197, 1931, pp. 73～76)。
- 4) 本作例については先行研究を参考にして頂きたい(拙稿「四天王寺護塔神出現の背景と道宣の『戒壇図経』」『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集 第十六号論集新羅仏教の思想と文化――

- 奈良仏教への射程——』GBS 実行委員会, 2018, pp. 33~53)。
- 5) これは『戒壇図経』の記述にある「龕窟」として指摘した(注4 拙稿, 2018)。原形はもちろん、中国の6世紀ごろの石窟にみえる、尊像を安置したアーチ型の「窟」などに求められる。統一新羅の石塔や僧塔にみえるようなアーチ型門扉からすると、「門扉」でも良からう。
 - 6) 張忠植「韓国仏舎利信仰 斗古莊嚴」『仏教美術史学』1, 2003, pp. 7~26。
 - 7) 張忠植「韓国石造成壇考」『仏教美術』4, 1979, pp. 104~139。
 - 8) 基壇の「二塔天寶十七年戊戌中立在之。甥姊妹三人業以成在之。甥者零妙寺言寂法師在旆。姉者照文皇太后君姊在旆。妹者敬信太王姊在也」の銘文より、天寶十七年(758)の造成であることがわかる。
 - 9) 同塔には、双塔ともに肉眼で初層に天衣、甲、岩座、剣を持つ四天王の輪郭がある程度確認できる。また、四面に浮彫したことからわかるように、遠願寺址双塔初層に表されたような四天王で間違いのないと言える。
 - 10) その他に縣一里石塔(9世紀後半)の初層にも門扉に四天王が表現されているが、隅柱は設けられていない。また、門扉ではないが、それと同様の意味を持つものとしては、石塔の初層において、格狭間中に四天王を浮彫した、国立慶州博物館の慶州・南山から移転された繩燒谷石塔(9世紀)、釜山大学博物館の石塔(9世紀)がある。
 - 11) 石窟庵は、『三国遺事』により751年創建との年代が定着している。しかし、四天王だけみても、いずれも胷あて以外は下半身の鎧を省略した形で、足はサンダルや素足など7世紀後半の形式を持つ。例えば、龍門石窟の敬善寺洞(660~665年)の持国天や増長天と、石窟庵の同尊像との類似性が指摘される(林玲愛「石窟庵四天王의 図像斗 仏教經典」『講座美術史』37, 2011, pp. 23~48)。また、最近公開された「仏国寺西石塔重修記」から、仏国寺創建が天寶元年(742)と明らかになり、同時に創建されたとされる石窟庵も少なくともそれ以前に遡ると指摘される(韓政鎬「『三国遺事』石窟庵創建記録의 美術史的 妥当性 検討」『文物研究』26, 2014, pp. 99~127)。今後、石窟庵の様式を中心とした年代に関する積極的な検討が必要である。
 - 12) この他に、石塔上層基壇に十二支像を表す例は、統一新羅時代の国立慶州博物館の下丘里出土の事例がある。
 - 13) これに該当する統一新羅初期の石塔としては、先述の高仙寺址石塔(686年以前)、皇福寺址石塔(692年)、羅原里石塔(7世紀末~8世紀初)などがある。
 - 14) 新羅の十二支像の基礎となった中国でも、石棺などの十二支像はその多くが、海や山にいる図像として表される。
 - 15) 統一新羅石塔において守護神が蓮華座を有する作例としては、慶州・獐項里寺址西石塔の初層に安置された八金剛力士(8世紀)がある。
 - 16) 2009年の「開元十□」年の台座銘文発見により、製作年と同時期の様式に矛盾がないことが明らかになっている(崔聖銀「昌寧 觀龍寺 龍船台 石仏坐像 小考 造像銘文斗 中代新羅仏教彫刻」『新羅史學報』16, 2009, pp. 225~260)。一方で、銘文の真贋を疑うなど、8世紀末~9世紀前半と位置付ける見方もある(林玲愛「昌寧 觀龍寺 龍船台 石仏坐像의 새로 發見된 銘文斗 様式의 問題」『新羅文化』47, 2016, pp. 55~78)。
 - 17) 771年作の聖徳大王神鐘の飛天も蓮華座に跪く姿であり、頭部に天衣で表現した光背が遠願寺址十二支像のそれに近い。しかし、聖徳大王神鐘の複弁で示した蓮華座や、斜めに上昇して海藻のように示された天衣の中には、遠願寺址十二支像のように筋や末端がV字型に分かれている表現があまりない。
 - 18) 佛言。如是如是。善男子。如汝所說。(中略) 人像畜生像鳥獸之像。遊閻浮提。教化如是種類衆生。(中略) 閻浮提外。南方海中有琉璃山。(中略) 是昔菩薩所住之處。(中略) 有一毒蛇在中而住。(中略) 中有一馬。(中略) 中有一羊(中略) 閻浮提外西方海中有頗梨山。(中略) 亦是菩薩昔所住處。有一獼猴。(中略) 中有一雞(中略) 中有一犬。(中略) 閻浮提外北方海中有一銀山。

- (中略)亦是菩薩昔所住處。中有一猪。(中略)中有一鼠。(中略)中有一牛。(中略)閻浮提外東方海中有一金山。(中略)亦是菩薩昔所住處。有一師子。(中略)中有一兔。(中略)中有一龍。(中略)是十二獸。晝夜常行閻浮提內。(中略)常應恭敬此佛世界爾時會中有一優婆塞。名曰淨德。白佛言。世尊。我今可得親見如是十二獸不。善男子。若有比丘比丘尼優婆塞優婆夷。欲得親見是十二獸。欲得大智大念大定大神通力。(中略)是人當以白土作山。縱廣七尺高十二尺 (大正 13.167b ~ 168a)。
- 19) 即得眼見是十二獸。爾時淨德優婆塞語明星菩薩言。善男子。(中略)爾時世尊讚是二人。善哉善哉。善男子。能如法問。能如法答。是陀羅尼因緣力故。四天王等。於我滅後能守護法 (大正 13.168b ~ c)。
- 20) 如此四天下四王及眷屬亦復能護持二十八宿等及以十二辰。(中略)付囑大梵四天王等。及付諸天仙衆七曜十二天童女二十八宿等 (大正 13.342c ~ 343a)。
- 21) 是十二獸晝夜常行閻浮提內。人天恭敬功德成就。已於諸佛所發深重願。(中略)此之十二獸。並是菩薩慈悲化導。故作種種人畜等形。住持世界令不斷絕。故人道初生。當此菩薩住窟。即屬此獸。護持得益。是故漢地十二辰獸依此而行。不異經也 (大正 53.511b ~ c)。
- 22) 今前列護佛塔神名。多出華嚴灌頂孔雀王賢愚大集大智論等。以繁文故。於此總而叙之。神名跋闍羅波尼梁言金剛。神名婆里旱河但反。梁言力士。初堅固光曜神。二日光曜神。三須彌華神。四淨雲音神。五阿脩羅王神取脩羅爲名。非脩羅也。六勝光明神。七樹音聲神。八師子王神如上。已解。九淳厚光藏神。十珠髻華光神。右十二金剛力士神王。(中略)斯即塔婆之相狀矣。今戒壇安佛舍利。層基標別。四列神影守護顯號。固其然乎。前十二神常守護佛塔 (大正 45.809a ~ b)。
- 23) 第二層上四角大神。所謂四天王也。常護佛法及以衆生。豈唯壇塔。(中略)又令天王威德勢力領四神軍主。(中略)四天王所部諸神隨名便配。且存前數。何由可盡其數量也。兩層色道內龕窟中神。經中大多。今依孔雀王經。明七星神。依方守護。其上層中安窟既少。可列七星神。配坐窟中。然二十八星神出沒增減。(中略)東方七星神名。(中略)南方七星神名。(中略)西方七星神名。(中略)北方七星神名。(中略)右二十八神方別七龕依名位列。至於下層亦有龕窟 (大正 45.810a)。
- 24) 下層四角大神。所謂金剛力士金毘羅散脂。並護佛塔故峙列四隅。以護持本也。東南角神名跋闍羅波尼又領般支分。西南角神名婆里旱又領般遮羅遮駄大軍主神。西北角神王名金毘羅又領婆多祁利大軍主神。東北角神將名散脂又領醯摩跋多大軍主神 (大正 45.809b)。
- 25) 韓国学文献研究所『通度寺誌』(『韓国寺誌叢書』5) 亜細亜文化社, 1979, p. 98。
- 26) 「龕窟」に守護尊安置を規定する『戒壇図経』に基づいた、通度寺戒壇の創建当初の姿は、同じく『戒壇図経』に関わると考えられる、四天王寺の神将像のような「龕窟」の形態だった可能性も高い。
- 27) 今據文求相。不言戒壇。然此戒壇即佛塔也。以安舍利。靈骨瘞中。非塔如何。迷名固執者不足言評。重爲提示。原夫塔字此方字書乃是物聲。本非西土之號。若依梵本。瘞佛骨所名曰塔婆。此略下婆。單呼上塔。所以經中。或名偷婆窣堵波等。依如唐言方墳。塚也。古者墓而不墳。墳謂加土於其上也。如律中。如來知地下有迦葉佛舍利。以土增之 (大正 45.809b)。
- 28) 注 4 拙稿, 2018。
- 29) 『大集經』の四天王とその眷屬の二十八宿などの諸守護尊を戒壇の護塔神として引用した『戒壇図経』と、それに基づき基壇に守護尊を安置した通度寺戒壇が、後世の戒壇と仏塔における基壇に守護尊を安置する規範に影響を及ぼした可能性についてはすでに指摘した(拙稿「通度寺戒壇の基壇部の考察」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』41, 2019, pp. 1~23)。

〈図版出典〉

図 4-1 国立文化財研究所『感恩寺址東三層石塔舍利莊嚴』2000, pp. 40～49。

図 5 大正 45 (『戒壇図経』), pp. 812～813。

図 14 敦煌研究院主編『敦煌石窟全集 6 弥勒経画卷』2002, 商務印書館, p.163。

その他の図版は全て筆者撮影。